

ヒトを含む生命体の生きた細胞に寄生し、細胞内で増殖する病原体をウイルスと呼ぶ。ウイルス感染による疾患には、インフルエンザ、ウイルス性肝炎、感染性胃腸炎などがある。

木村宏先生は、名古屋大学大学院医学系研究科に籍を置き、ウイルス学を専門に研究している。特に注力しているのはがんウイルスの研究だ。

は、成人のほぼ9割が感染し保有していると言われる。感染後、EBウイルス感染症を発症する。邪のような症状で軽く済み、そのままウイルスが休眠状態になるため、ウイルスの影響を受け、たとえ実感する人は実には少ない。だが、現実にはこのEBウイルスが原因でがんになる人は多くいる。

ところがEBウイルスに関しては依然不明なことも多く、いまだワクチン製造にまでたどり着けずにいる。今後のさらなる研究が待たれるところだ。

木村先生は、ほぼすべての人の体内にあるEBウイルスの量を測り、その実態を確認することでがん治療に役立てよう、採血時にEBウイルスの定量を行う方式を1997年に確立した。この画期的な診断法は、世界ではスタンダードな検査として採用されているが、日本ではまだ健康保険適用外となっている。「保険適用になればもっと多くの人が救われるかもしれない」と木村先生は今後に希望を託す。

**名古屋大学大学院医学系
研究科ウイルス学教授**

木村 宏先生



「治療につながるよう研究をさらに深めていく」と話す木村先生

**DOCTORが薦める
名 医**

**がんウイルス解明に力
画期的な診断法を確立**

がんの中には、ウイルスの影響を受けて発病するものがある。また、ウイルスに感染はしているが発病する人とならない人がいることもわかっていく。がんウイルスについてはまだまだ解明されていないことが多

い。現在、がんウイルスと判明しているものは7種類。肝臓がんを引き起こす肝炎ウイルス、子宮頸がんウイルス、或人T細胞

がんウイルスに対抗するにはワクチンの開発が第一義。肝炎ウイルスに対する研究は進んでおり、B型肝炎ワクチンも開発された。昨年から乳幼児へのワクチン定期接種化が実現。今後は新たにB型肝炎に罹患する患者とウイルスが原因のがん患者の激減が見込まれる。C型肝炎についてはウイルスの活動や増殖を抑える新薬が開発された。また、子宮頸がんワクチンも開発、投与が始まっている。

ところがEBウイルスに関しては依然不明なことも多く、いまだワクチン製造にまでたどり着けずにいる。今後のさらなる研究が待たれるところだ。

木村先生は、ほぼすべての人の体内にあるEBウイルスの量を測り、その実態を確認することでがん治療に役立てよう、採血時にEBウイルスの定量を行う方式を1997年に確立した。この画期的な診断法は、世界ではスタンダードな検査として採用されているが、日本ではまだ健康保険適用外となっている。「保険適用になればもっと多くの人が救われるかもしれない」と木村先生は今後に希望を託す。

名古屋大学にかかわりの深い後藤新平の言葉「金銭を残して死ぬ者は下。仕事を残して死ぬ者は中。人を残して死ぬ者は上」という言葉が好きだという木村先生。「まだそこまでの人間ではないですが」と謙遜しながらも、後進の指導に熱心に当たっている。

長年の研究で「ようやくリンパ腫の発生機序(仕組み)の手掛かりが見えてきた」と語る木村先生。「今後もっと研究を深めます。それがゆくゆくは治療に反映されるはず」と言葉に熱が入る。

名古屋大学大学院医学系研究科 総合医学専攻 微生物・免疫学講座 名古屋市昭和区鶴舞町65、電話